

結 草

kusamusubi

No.44

Publishing house: 2-19-32 Morioka Kanazawa
Ishikawa 920-0843 JAPAN Shinshu Otani-
ha Ryukouzan Jhokoji Phone: 076-252-4922
<https://jhokoji.net> info@jhokoji.net 2025.7.1

そくばくの業をもちける身

道因寺住職

相馬

豊

浄光寺さんの報恩講の二日目、結願日中のお勤めが終わったばかりです。昨日は「お念仏を申しましょう」と先輩達からの呼び声を聞き、私たちは育てられ成長してきたわけですが、なぜお念仏を申しましょうと言われているのか意味がなかなかはつきりしないとお話させていただきました。念仏申しましょうというのには私に対する呼びかけの言葉であり声です。呼びかけられたわけですからそれに応えていくと

いうことは私たちにあります。しかし私というものが色んな問題を抱えているけれど、その問題についていつの間にか分かったつもり、解決したつもりになつておりませんか。昨日もお話しましたが、9月28日に道因寺で親鸞聖人の御命日の仏事を執り行った時に出会った女性の方はこう言われました。「7月、8月と連続で大親友を亡くしてしまいました。そのことを通して私も10月に還暦を迎える歳になりま

した。改めて還暦ということ考えた時、あとどれだけ生きていられるのかという不安と恐れを今感じています」と。「その不安と恐れはどうすればいいのでしょうか」と、こういうことを私に尋ねられました。実はこの不安と恐れということとを私たちはややもしますと、真宗の教え、仏教もつと広くいいますと、宗教というものを心の問題として捉えている面を持つていると思います。広い意味でいうと宗教とは心の問題を解決してくれると私たちは受け止めていることが多いと思います。

しかし、この還暦になった方は二人の方の死を縁として不安と恐れを感じて、これからどれだけ生きられるのか心配ですと、言いました。ややもするとこの不安と恐れを心の問題と私たちは捉えるのですが、心の問題なら解決はつきます。こうすればあなたの抱えている不安や恐れは消えていきますよと。心の問題ならそれに対応する働きかけができるのですが、この方の抱えている不安と恐れというものは果たして心の問題でしょうか。実はこの不安と恐れを抱えているのはご本人、つまり身の問題だということなんです。心ではないです。不安と恐れを抱えている「存在」、「身」の問題。これが特に真宗の教えを聞く時にいわれることです。だから宗祖親鸞聖人はこういう言葉で私たちに、身の問題なのですと、心の問題ではありませんよということを言われました。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」(『歎異抄』後序)。「そくばくの業をもちける身」、心の問題とは言っていないのです。身の問題だと言っている。この身の問題ですと。確かに私た

ちは不安や恐れは心の問題だと思ふけれど、いずれ命終えていかなければいけない事実に対する不安と恐れは消えないということです。つまり最後の最後で私に残る問題は何かということ、不安と恐れです。最後の最後までそれを抱えていくということ

です。そういう身です。優しい言葉、癒しの言葉をかけられても、また次の瞬間にまた違う不安と恐れが覆いかぶさってくる。どんな言葉をどれだけ聞いても消えない。不安と恐れは親鸞聖人は私たちの存在をこういう言葉で押さえられました。私たちの存在は具体的には何かというと、「煩惱具足の凡夫」と。私たちの存在、身の問題を言葉で表すと「煩惱具足の凡夫」である。

しかし一般的に煩惱という言葉葉を聞いても、私たちはそれを心の問題だと思ひます。例えば大晦日になりますと、除夜の鐘を突く。除夜の鐘というのは今

年一年の百八つの煩惱の数だけ鐘を突くことで消し去って、新年にリセットして新しい自分が始まるのだ。そういう風に世間では捉えがちです。しかし本当にリセットできるのでしょうか。できません。

煩惱というのは心の、心理的な問題だと思つてしまひますが、実は親鸞聖人はこの煩惱というのは二つあるということです。「煩」身をわずらわす「惱」こころをわずらわす。身を煩わすものは今年、私も皆さんも経験している。何気ない会話の中で私たちは身を煩わすものと向き合つたのです。それが今年の夏の暑さです。何気ない日常会話の中で会う人会う人に「今日も暑いですね」こう言ひましたね。「いつまでこの暑さは続くのでしょうか」と。つまり私たちの身を煩わすものの一つは暑さです。そして今度はこれから11月になると時雨が来て寒くなると日常会話が変わりますね。「寒いですね」、「寒くなりましたね」

つまり寒暖ということです。身を煩わす具体的なものの一つが寒暖です。寒さ、暑さ、これが身を煩わします。嫌ですよ。暑いもの嫌。寒いのも嫌。春と秋の氣候の良い時が好きです。暑さ寒さは身を煩わすものとして受け止めます。

では身を煩わすものは暑さ寒さだけかというと、この暑さにも関係します。熱中症に注意してくださいと熱中症アラートが出され、エアコンが効いてゐる部屋でも水分を補給して下さいと注意が促される。実はこの水分補給というのも「煩」ということに関わるのです。喉の渴きに私たちは耐えられないということ。喉が渇くと水が欲しくなります。さらに身を煩わすものは喉の渴きだけではない。もう一つあります。餓えです。食べられなくなつてお腹がすけばすぐほど何か物を食べたくなつてくる。つまり渴きと餓えというものも身を煩わす。渴きと餓え。そしてもう一つありま

す。人間です。人間が私を煩わすのです、この身を。

今は言われなくなりましたが連れ合いから言われたことがあります。私が報恩講に行つて予定よりも早く歸つてきた時がありました。そうしたら連れ合いが私に向かつてこう言ひました。「もう歸つてきたの」と。「ただいま」と玄關から入つてきたら「もう歸つてきたの」と言われしました。彼女にしてみたら厄介なものが歸つてきたのでしよう。厄介なものつて何ですか。身を煩わすものです。こんな厄介な私の身を煩わすものが予定より早く歸つてきた(笑)。だから「もう歸つてきたの」です。何気ない言葉の中に私たちはちゃんと身を煩わすものを知つてゐるのです。暑さ寒さ、渴きと餓え、人の言葉で身が煩わされる。するとこの三つの中で心を煩わすものは何かというと、喧嘩ですね。「私が正しい」と、私が正しいというところに立つからお互いがぶつかり合ひま

それともう一つはものさしです。私たちは今日までの学びの中でそれぞれが世間や物事に対する価値を測るものさし、尺度を持っています。その尺度によって人を測ります。私はあの人は好きだけどこの人は嫌いやと。こういう尺度を持っています。実は私もそのものさしによって人から測られています。自分が人を測るということは相手からも測られています。気を付けて下さいね。ついつい私たちは他者から測られていることを忘れるのです。自分は正しいと思っていますから、あの人を責めるけれど、実は責められているのも私です。だから共に生きましようという言葉はありますけれど、共には生きられない。私たちはそれぞれの価値観というものさしを持って人を見ていますから。

ではこの身を煩わせるもの、心を悩ますものを、何か修行したら消えますか。例えば他宗の

親鸞聖人はそういう私たちを「煩惱具足」と言いました。具足

この身を煩わせるもの、寒暖と渴きと餓え、そして人間関係。これは現代の社会の問題に当てはめますと、寒暖の問題とは何かといえば、環境問題です。地球温暖化の問題です。ゲテールス国連事務総長は今年言いましたよね、地球温暖化ではなくて地球沸騰化だと。それほどの人類の危機。危機という言葉は何度も皆さん聞いていると思うのですが、仏教でいうところの「機」は何かというと、人間です。危機ということは人間が危ないということです。経済危機

と言っても経済が危ではないのです。そこに携わってシステムに身を置いている人間が危ないのです。危機というものは人の問題です。そういう私たちです。

人間の問題なのです。人間が身を抱えているということなのです。心を抱えているという問題ではなく、身を抱えているという問題です。だから先ほどの今年還暦になる方は不安と恐れを抱えている、どうしたらいいのでしょうか。どうしたらいいのかといわれても言葉では解決できないのです。こうすればこうなりますよ、そう言ってもそれは一時的な凌ぎです。これは絶対に取れない。最後の最後までそのことに向き合っていくしかない。最後の最後まで取れない。それを抱えている私という身の問題です。その身ということとを親鸞聖人も実は抱えたのです。身の問題を。自分ではどうすることもできない身の問題を抱えられたのが宗祖親鸞聖人です。私たちと同じです。宗祖

親鸞聖人はその身の問題の事実になつて生きられた。

これは中国の宋の時代、石芝宗曉せきししゆうぎようという僧が書かれた『楽邦文類』の言葉です。この宗曉という方は宗祖親鸞聖人とほとんど同じ年代を生きられた方で少し先輩に当たります。この『楽邦文類』を親鸞聖人が『教行信証』に引用されたということは、ただこの言葉が気に入ったからではないと思います。ここに書かれている言葉一文字に実はこれは私やということを見つけたからです。この言葉に自分を見たからです。これが教えを聞くということです。教えの言葉に自分を見出す。教えの言葉に自分の存在を発見したということなのです。

こういう言葉です。「ああ夢幻にして真にあらず、寿夭じゆうようにして保ちがたし。呼吸の頃あいたに、すなわちこれ来生なり。一たび人身を失いつれば、万劫にも復せず。この時悟らずは、仏もし衆生をいかしたまわん。願わく

は深く無常を念じて、いたずらに後悔を貽おこすことなかれ」、これが原文です。これを現代的に訳すと、「人の世は夢幻であつて、真ではない。命儚はかなくていつまでも留まることはできない。ひとたびの間にこの世に過ぎ去ってしまうのである。ひとたびこの身を失えば、永劫、永遠に還つてくることはない。いまここにおいて悟らずば、仏もまた成すすべもない。願わくば人生の無常を深く心に留めて悔い無き命を生きて欲しい」。

この言葉に宗祖親鸞聖人は自分の身を見たのです。今皆さんも原文の中に自分を発見されませんでしたか。見出せませんでしたか。例えば、「呼吸の頃に、すなわちこれ来生なり。一たび人身を失いつれば、万劫にも復せず」、これは「私」ということを言い当てられておりませんか。お釈迦様はこう言われました。「出る息、入る息を待たずして命終わる」。私たちの何気ない呼吸です。一息、一息、誰

も今吸ったとか吐いたと意識しながら呼吸していません。しかしこの命も元はこの一息の呼吸だと。無意識の呼吸が人の命ですよ。

昨日もお話しましたが蓮如上人の『御文』五帖目十六通でいうと、「すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちにとじ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて・・・」これは私も皆さんも今日まで大切な人を見送ってきた実体験。その事実が教えてくれている。一息一息の呼吸が私たちの命。生死するお命です。一息一息が生死を表している。

そしてそのお命は、「一たび人身を失いつれば、万劫にも復せず」、これもお分かりだと思えます。今こうやってこの身を置いていても、ひとたびこの身を失えば、永遠に還つてこないということです。それが私たちが正に臨終に立ち会つて人の死を見送つてきた歴史です。臨終

に立ち会って、そしてその人を見送ってきた。茶毘に伏し、白骨となつて還つていただく。誰も蘇つた人はいません。つまりここに親鸞聖人は自分を見たわけです。これが私の身の事実やと。この身の事実。この身の事実に触れた。

「この時悟らずは、仏もし衆生をいかしたまわん」、いまここにおいて悟らなければ仏もまた成すすべもなし。仏であつてもひとたび人身を失つたものに対して成すすべがないというのです。仏でも。阿弥陀様であつても、人身を失つたら成すすべがない。よく死んだら極楽やお浄土へ往くといひますけれどそうではないと。死後往生ではない。成すすべが無いのですから。だから問題は「この時悟らずば」、この時つてどんな時ですか。今ここに身を置いてゐる今この時です。今ここにこうやつて生きてゐる時、改めて私という身が奇跡的に生まれて奇跡的に生き

なければ、いつ本当の自分というものに出あうのですかと。私が縁あつてここに人の身を頂いてきたということを、今この時、悟つて欲しいというわけです。

つまり先程冒頭に拝読した「三歸依文」です。「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く・・・」受け難い身をここに受けているのです。受け難い身でありますけれど、私たちはその時に選択は出来なかつたのです。父、母を選ぶこともできませんし、生まれる国を選ぶこともできませんし、生まれる時代、社会を選ぶこともできませんし、性別も選ぶこともできませんでした。何一つ私たちは選ぶことができない中に人の身を受けました。気づいたらこの環境の中に、この時代の中に産み落とされていたのです。選ぶことのできないこの時代、社会環境の中に産み落とされてきた。それもただ産み落とされてきたのではない。人身という人の身を持つて生ま

れてきました。

それを杉山平一という方が私たちにこういう風に問いかけて下さいました。「身体が先に生れたのである。その用事は一体何であつたのか。いつの日か思い当てることができる人は幸せである。僕はわからないままです。ごすごあの世にかえる」。私の身、身体が先に生まれてきたのだと。その用事は何であつたのか。私たちはいつの間にか身体が先に生まれてきたことを忘れていきますよね。そして用事は何ですか。世間一般では生まれてきた理由は、豊かな家庭生活を築くため、豊かな人生を送るため、つまり幸せを求めて生きていますと、こう世間ではいいいます。確かにそれは間違いないです。誰もが豊かな人生、豊かな家庭生活を、幸せを求めて続けて生きています。求め続けてきているのは間違いないけれど、現実はどういう風になつていくかという、格差がどんどん広がつていき、人が人としていら

れなくなつていく。

今はあまりそのことは言わなくなりましたけれど、仕事がいっぱいあつた時では、あなたの代わりはいっぱいいますよと。あなたに代わる人材はいくらでもいますと。材、ですよ。材料。そういうふう人間という言葉がいつの間にか人材に変わった。もの扱いです。あなたはこの仕事辞めていいですよ、代わりの人材はいくらでも補充できます。何気ない世間で使う言葉の中でも人間が人間として見られなくなつてゐる。

その人間とは何かといったら、みんなこれを抱えているのです。「一たび人身を失いつれば、万劫にも復せず」、これは共通の大事です。日本人だけではないです。人類がみんな抱えている問題です。だからここに国籍、人種、民族、性別を超えて、みんな共に生きていきたいと思います。こう願ひ続けているのが仏です。でもなかなかそれは現実になりません。なぜならば身を

煩わせるものがあるから、現実の社会の中で、世界の中で争いが絶えません。ロシアとウクライナ、イスラエルとガザ、いろんなところで紛争が続いています。なぜ人と人はお互いを認め合うことができないのでしょうか。いつの間にか、私たちは共通の大地にありながらその大地を忘れてしまう。

今から50年ほど前でしょいか。アポロ11号が初めて月に着陸しましたね。母船に残ったコリンズという宇宙飛行士がいます。2人の宇宙飛行士は月面に降りられたけれど、コリンズは一人だけ船に残って月の周りを周っていたのですね。そのコリンズさんが青い地球を見て言った言葉があります。「世界中の指導者はここへ来てこの地球を見るべきだ。どこにも国境はありません。人と人とのいがみ合いもありません」、こういう言葉を残されています。宇宙から地球を見ると、国境もない、争っているところも見えない、ただ青

い地球が浮かんでいるだけ。「世界の指導者よ」、こう呼びかけた。何かそこに願いがある。だけれども願いを持って生きているけれど、その願いが願いにならない現実があります。でもそこで諦めるのではなく、その願いに生きようとするのが大事。

宗祖親鸞聖人はこの『楽邦文類』の中に私という身を見出された。「一たび人身を失いつれば、万劫にも復せず」、これは私のことや。私たちもこの言葉の中に私を見るわけです。「この時悟らずは、仏もし衆生をいかしたまわん」、そして仏は言います。成すすべがない。どうしようもできない。ひとたび命を失ったら蘇らせることもできない。だから仏は願うのです。それが最後の言葉ですね。「願わくは深く無常を念じて、いたずらに後悔を貽すことなかれ」、ここで注意をしていたきたい言葉遣いがあります。一つは「いたずら」、それと「貽す」とい

う漢字です。普通なら「残す」とこちらの漢字を書きませんか。「貽す」こちらの漢字を使う時は「貽す」ということです。さりとて続くということなんです。りげなく輪になったように続いていくということなんです。それが私たちの生活の中にあります。

一昨日ですけれど明け方夢を見ました。その夢の内容は過ぎ去った過去の出来事です。それは私にとつて苦い思い出、嫌な思い出です。つまり何かという後悔したことです。後悔したことが今こまで続いているのです。そういうことはないのです。あの時こうしておけばよかった、こんな対策しておけばよかったと。後悔つてずっと繋がっていません。ではその後悔した時に戻るかといったら、戻れないです。つまり脈々と私たちは後悔を続けてきているのです。だから仏は「いたずらに後悔を貽すことなかれ」と。

しかし私たちはいたずらにしています。日常生活にあつてもこういうことありません

か。今日すべきことがあるのだけれど、もう疲れたから明日にしよう。明日が駄目なら明後日がある。こういうふうにはち日常の感覚の中で、この身はちゃんと知っているのです、貽すことを。そうやって上手く先へ先へ延ばす。でもその姿を誰が知っているかといえ、仏です。仏は私という身の存在を知っているからこそ、「後悔を貽すことなかれ」と。

そして一番大きなことは、「深く無常を念じて」です。「無常」、



先程の蓮如上人の言葉で言うならば「すでに無常の風きたりぬれば」です。「ふたつのまなこたちまちにとじ」です。当たり前でなくなるということです。でも

私たちには日ごろの心を持っていきますから、私はまだ大丈夫だと思つています。余裕と油断がありませんか。日ごろの心で私というものを見ますから、やっぱりそこに余裕と油断が出てきます。でも余裕と油断を持つていても、どこかでそこをきちんとか確かめなさいよと。流されるだけではなくて、そういう身だということを確認するには言葉に出あわなければならぬ。人間の良いところは忘却するということ。全部覚えていたら大変なことです。忘れるからこそ、新たな言葉と出あって、もう一度自分を振り返り、立ち止まることができる。そこで自分が立っている場所を確認するわけです。今まで生きて来たけれど何か見落としているのではないか。何か大事なことを忘れた

ていたのではないか。そういう確かめをするとき、先人達の言葉というものが役に立ちます。先人達の歩みの中にその言葉を見出す。

松尾芭蕉が、小松にある那谷寺に來られて、日本海に沈んでいく夕日を眺めた時に作つた俳句があります。その時、松尾芭蕉はその五七五の中に自分の人生を語られました。「あかあか／日はつれなくも／秋の暮れ」こういう一句を作られた。今も那谷寺に残っています。「あかあか」というのは青春時代です。輝いていたわけです。しかしつまでも続くかという、輝いた青春時代はあつたけれど、いつの間にかこの歳になる。「秋の暮れ」、晩秋です。黄昏を迎えるということ。自分の人生です。

の跡を求めず、故人の求めしところを求めよ」。つまり一人の人間の足跡を辿るだけではなくて、大事なものはその人が生涯をかけて何を求め続けたかという願いや、志に目を向けて歩みなさいよと。つまり私たちは願われ続けていく身だということです。仏から。現実の社会、時代は厳しいけれど、どうかその中において一人の人間として生ききつてください。苦悩を抱きながら一人の人間として生ききつていください。そう願ひ掛けられている存在です。

でも具体的には身を煩わすもの、心を悩ますものに振り回されます。そしてそれを具足している身だと。そのことが教えを聞くことによって領き、そこに初めて新たな自分の誕生が見えてくるわけです。教えの言葉に触れて初めて自分の紛れもない正体が明らかになる。周りにいる人たちをものさしという価値観で測つて、好き嫌いと言ったり、是、非というところに立つて、私は正しいと言つていたけれど、煩惱具足の凡夫、この自覚に立つた時、周りの人、目の前の人は違つて見えてくるのではないでしようか。周りの人、目の前の人はただの人ではないということです。嫌いだと言っている人も生きることに様々な苦しみを抱きながら生きています。ただそれを好き嫌いというところで切つている問題、私の問題。どの人も生きることに苦しみながら、悩みを抱えながら、挫折を抱えながら、出来ることを精一杯してきている。しかし、現実的には生きづらさの中にあつて、倫理道徳では悪いと分かつていてもそれをしなければ生きられない人間の姿。分かっているけれどもそれをしなければならぬという人間の辛さ。人間の危うさです。それを親鸞聖人は「そくばくの業をもちける身にありけるを」と。縁があれば私たちは何をするかわからない。今日まで様々な数多くの縁によつてこの身が支えられ

てきた。そのそくばくの身、数多くの縁の中で育てられ、そして生き続けてきた。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」、許されているということ

く さ む す び

です。仏は私たちの存在を許してくれている。ところが私たちは人と人との関係を生きていますから、この人は許すけれど、この人は絶対に許さないとかそういうものに縛られています。そういう私たちを煩惱具足の凡夫と。どこまでいっても私という存在は煩惱具足の凡夫です。と。そうすると、そこに立って自分と関わる人にいがみ合う言葉は吐く時に、深呼吸して違った言葉で接することが出来るのではないのでしょうか。いがみ合う前に深呼吸して時間を置いて優しい言葉に変えることができるのではないのでしょうか。私た

ちの一番身近な人間関係の現場、それは家庭です。その一人一人とどう向き合っていくか。両親、祖父母、連れ合い、子供たちと、それぞれがそれぞれの生き様を持っています。違いがあるわけです。その違いの中でそれぞれを認め合う、尊敬し合う関係。

そういう中で親鸞聖人が「お念仏を申しましょう」と私たちに呼びかける。お念仏を申しましょうというのはいくつかの言葉です。「あなた、人間をどこで忘れたのですか。人間を忘れていませんか」「それが「お念仏を申しましょう」という声ということとです。お念仏を申して、「人間を忘れていないではないでしょうか。どこで人間を忘れたのですか」そのことを呼び返させる教えの言葉、それがお念仏という言葉ではないのでしょうか。

お念仏の声に呼び覚まされてそれに応えていく。そういう先輩達の歴史ですね。歴史という言葉を使いましたけれど、なん

と2500年です。お釈迦様からずっと呼びかけられている歴史です。その歴史の最先端に立っているのが私や皆さんです。最先端にいるのです。その私にお念仏を申しまうと亡き方々の呼び声が私の所に届けられている。どんなに時代が変わり、科学技術が進歩し、文明が発達したとしても、一向に変わっていないのは人間の問題です。人間の抱える問題は一向に解決していない。より深刻さを増してきているのではないのでしょうか。毎日報道されているのが現実です。その現実の中にあつて人間を忘れている私だからこそ、人間に戻ってくれやと、一人一人の存在を確かめていって欲しいと、その呼び声が南無阿弥陀仏という声となっているのかと思います。そのことに触れるのがこの報恩講という仏事ではないかと頂いた次第です。二日間に渡り尊いご縁を頂きました。ありがとうございます。

《編集後記》

◇本文は令和五年十月十八日、浄光寺「報恩講」結願日中の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

行事のご案内

「追弔会」

八月十三日(水)・午前十時
法話・細川公英(順教寺住職)

「きこまいけ」

毎月二十八日午後二時
一緒に『正信偈』を学びましょう
お気軽にご参加ください

「オテラート金澤」(お寺+アート)

九月二十日(土)・二十八日(日)
午後一時～午後六時

詳細はこちら

